まちむら発見②

総湯を教室に。地域と創る場所学習

山口県長門市　長門湯守株式会社

私たちの活動する地域について

長門湯本温泉は、６００年前、大寧寺の定庵禅師が住吉大明神からのおつげによって発見した〝神授の湯〟と伝えられる「恩湯」から始まる。江戸時代には藩主も度々訪れた由緒ある温泉は、浴室内に住吉大明神の石像を拝し、その呼称からも人々の中に尊敬と感謝の心が受け継がれてきたことが伺える。

恩湯を中心に音信川沿いに発展した温泉街は、１９５０年代以降、徐々に姿を変える。地元の組合で運営されてきた恩湯は行政運営となり（１９５１年）、各旅館は施設内に温泉施設を開発。１９７０年代には、伸びていく需要を獲得するため郊外に敷地を求めて旅館が大型化、１９８３年に宿泊者数のピークを迎える（年間39万人）。しかし、団体旅行に対応する形で発展したまちは、団体から個人へと旅行スタイルの変化に伴い右肩下がりとなる。各旅館が、食事や土産物、芝居などを施設内で完結させる形で発展してきた結果、地域に根差した営みは影を潜め、まち全体も活力を失っていく。２０１４年には、宿泊者数がピーク時から半減（年間18万人）、１５０年の歴史を有する老舗大型旅館が廃業、まちそのものが消滅してしまう危機を迎える。

温泉街再生に向けた公民での取組と恩湯の地域の手での再建

この危機に対し、地域全体での再生に向け、２０１６年、地域・事業者・行政が一体で「長門湯本みらいプロジェクト」を組成、川・湯・伝統工芸（萩焼）をはじめとする地域資源を礎に、自然豊かで魅力的な温泉街を再生する公民連携の取組がスタートする。将来推計に基づく空き家マップを可視化するなど危機感を共有し続けるとともに、「長門湯本温泉観光まちづくり計画」として地域全体で将来ビジョンを掲げ、駐車場の再配置や広場・道路・河川などの公共空間の再編など、生活環境にも関わる変化に関しては4年間で85回に及ぶ社会実験やワークショップを繰り返すことで幅広い関係者との対話と合意形成を積み重ね、温泉街全体で再生に向けた基盤を構築してきた。

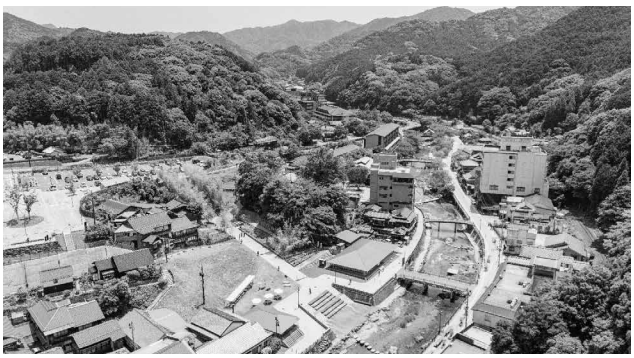
歴史の出発点であり地域のシンボルである恩湯も、温泉街の歴史とともに変容していた。約60年続く行政運営の中で徐々に地域らしい特徴を失い、施設も老朽化、年間数千万円の財政負担を生みだしてしまう課題施設となっていた。このため長門市は、行政運営の歴史を閉じ、民設民営での再建に向けた事業公募に踏み切る。これに対し、旅館の若旦那や地元の飲食店、デザイナーが「長門湯守株式会社」を結成し、再建を担う。長門湯守は、旅する人も暮らす人も誰もが集ってきた恩湯を中心に確かに存在した日々の営み・楽しみの姿を、この場所の魅力を改めて見つめ直すことを通じて再生することを目指して結成。２０２０年には、自らの投資により恩湯を再建し、駐車場と化していた温泉街の中心部に再生した「恩湯広場」の運営も含め、地域の手での温泉街の再出発を果たす。

希少な資源を受け継ぎ、地域とともに場所の記憶を創る

恩湯は泉源の真上に立ち、湯は岩盤からの自然湧出、湯量に沿って限定的な大きさとした浴槽に浸かれば、古代より滔々と湧き続ける「神授のお湯」を味わうことができる。長門湯本の自然資本である温泉、音信川を中心とした自然環境を尊重した持続可能な事業と言える。

ここに、生活者の暮らしの喜びに即した固有のまちづくりを重ねることにより、観光・経済のみでなく、暮らしに根差した文化醸成に結び付け、真に地域に根差した持続可能性を生み出すことが重要である。このために、長門湯守は、まちづくり会社や住民や商店組織、教育機関及び行政と連携して活動を進めている。

恩湯を舞台に地元の向陽小学校と連携して取り組んでいるのが、「子ども湯道教室」である。小学3年生及び4年生が、総合学習の時間を活用し恩湯を体験する。具体的には、まず理論編として、大寧寺を訪問し、恩湯が生まれた物語を通じて地域の歴史を学ぶ。その上で実践編として、恩湯を訪問し、地中で温泉が生まれるメカニズムを通じて自然資源を学んだ上で、実際に入浴。入浴マナーはもちろん、湧き続ける泉源を眼前に自然の恵みへの感謝の念を再確認する。暮らしや地域の成り立ちそのものを、恩湯を通じて小学生に伝え、また、この様子を子どもたち自身で発表するなどを通じ、地域自身が学び直す機会として、本年で3回目を迎えている。



地域の再生に向けて取り組む温泉街の全景



住民ワークショップの様子

湯への感謝の念を学ぶ

隣接する恩湯広場では、毎年冬、地元出身の童謡詩人金子みすゞの詩の世界を味わうライティングイベント「音信川うたあかり」を開催している。中心となる恩湯広場は「みすゞのお庭」と題し、市内の幼稚園・保育園の園児、小学校児童、中学校生徒の全員が詩をテーマに一つずつ手作りする約2500個の紙製ランプシェード「あかりのうつわ」を設置、地域が一体となったおもてなしで特別な風景を創り出す。子どもたちにとっては、金子みすゞという地域に根差す文化を見つめ直す時間となり、これを親子二代・三代と味わい直す機会に結び付け、本年で7回目を迎えている。

地域の生活文化醸成に向けて

長門湯本温泉は、再生に向けた取組の中で広場や川床など新しい空間を生み出してきた。しかし、地域の未来を創るのは人であり、その原点となる場所との記憶を生み出すのはこれからである。その中心は、地域に根差した恩湯であり、恩湯を起点とした地域の生活文化を醸成することこそが、最大の魅力となる。このため、この場所ならではの魅力に根差した活動を地域教育と連動して生み出すことで、子どもたちとともに場所の記憶を創り、それを通じて大人を含む地域への誇りを取り戻すことを目指している。

（長門湯守株式会社　大谷和弘・伊藤就一）